

養育里親

～もうひとつの家族～

20

坂口 伊都

はじめに

前回は、「新しい社会的養育ビジョン」について書きました。その影響で今、里親委託に注目が集まっていますが、実のところは家族再統合や特別養子縁組に焦点があたる内容であり、長期代替養育は否定的に捉えられていることを忘れてはなりません。その中で我が家は、長期での養育里親をしています。改めて、里子と家族になろうとしていくことの意味を考え始めています。里子も里親家族側もいろいろな想いや課題を乗り越えながら、ここまでやってきました。家族になろうとしなければ、ここまで頑張れなかったかもしれません。

今回は、その里親家族の「里兄・里姉」に焦点を当てて書こうと思います。里兄は、いつ頃

からでしょうか、家族とあまり言葉を交わそうとしていません。里親をする時も、あまり深く考えることもなく承諾しました。実際に里子が家族の中に入って、どのように感じたのか外から見ている中では、よくわかりません。

里姉の方は、悩み、泣き、訴えながら揺れを前面に出していました。イライラすると機嫌が悪かったりすることもあり、感情をストレートに出しているように見え、またファミリーホームに1週間ほど滞在した経験もあり、高校生になったことを機会に里姉として自分の体験を語ってみたいかと誘ったところ、やってもいいとの返答だったので、里母の私と一緒に体験を語り始めています。

もともと里母として話をした時、フロアから実子の話を聞きたいと言われていたことが、ずっと頭に残って気になっていました。実際に娘

がどのように感じて過ごしてきたのか知りたいという気持ちと、母である私が娘の代弁をすることは不可能だと感じていたので、娘が自ら語って欲しいと思いました。

さらに、娘の進路希望は今のところ生物関係で、福祉分野を考えているわけではないので、人生の中の一つの体験としてプラスに働けばいいと考えています。以前に「すごい、英才教育ですね」と言われたことがあります。その意図はありません。娘も動物は好きだが、人間嫌いだと豪語しています。傍から見ていると、人とのつきあいは長けている方だと思うのですが、頑として人間嫌いを譲らないので、そういうことにしています。今回も最後までおつきあいください。

打ち合わせ

娘は、熊本市の里親支援機関「優里の会」の公開講座で初めて話をしました。そこに参加していた方が、「長崎県里親育成センターすくすく」の研修会講師に推薦してくれたそうで、親子で呼んでいただきました。私と娘が並び、その時々はどう感じたのかを並行して娘にも話してもらおう形にしています。

優里の会では、最初に内部研修の依頼を受けて、私が話をさせてもらいました。外部研修でもう一度と依頼がきたので、里姉の話を入れてもいいか打診し、快諾をいただいたことで実現しました。娘にとって全くしがらみがなく、暖かく受け入れてもらえる場所だと感じていたので、承諾いただけで有難かったです。

娘と打ち合わせをするに辺り、気持ちを切り替えたかったので、家ではなく喫茶店ですることになりました。打ち合わせをしてみて初めて、家では里親について議論することなく過ごし、人前で話す機会をいただいたことで、親子で里

親になったことについて話すことができたことに気づきました。

家の中では、里子がいるから話しにくいという条件下になりますが、日常生活について家族で話題にしようと思っていないことにも気づきました。そして、娘の本心を知らずに過ごしてきたことも認識し、胸が痛くなりました。娘の気持ちを知りたいと思いつつ、知ることを怖くも感じています。

打ち合わせでは、まず私が今まで話してきたことを娘に紹介しました。何故里親をしたいと思ったのか、里親になるまでの葛藤、委託してから里母として苦しかった思い等を話すと、娘が「そうだったのか」と言いました。私としては、隠しているつもりはなかったのですが、敢えて伝えるということもしていなかったのだと感じ、自分の思いがあまり伝わっていないことに驚きました。伝えていなくても、相手の受け止め方が違ったり、流したりするものです。それは仕方がないことですが、何事も伝えたからと思わない方が賢明だと学びました。

打ち合わせで里親体験を話し合っていく中で、娘が2回涙を流しました。その顔を見ると、私の気持ちがざわつき、チクンと針で刺されたような痛みを感じます。今でも、娘が隣で何を語るのかドキドキしているところがあり、毎回、新事実を突きつけられています。

打ち合わせで初めて娘が泣いた場面は、委託前にファミリーホームに娘一人で行った体験でした。ここのファミリーホームには、家族で泊めてもらった経緯があり、次の年に子どもだけ遊びに来ませんか誘っていただきました。兄は中学生になっており、部活動が忙しかったため、小学6年生の娘が一人で行くかどうか悩んでいました。娘が悩んでいる時に「行けば、少しは里子ちゃんの気持ちがわかるようになるかもね」と話していました。娘はしばらく悩んでから行く決意をし、1週間ほどファミリーホー

ムで過ごしました。娘と同じように遊びに来ている年下の女の子もいて、帰ってきた時にはテンションが高く、あれをして、これをしてすごく楽しかったと話していました。「〇〇お兄ちゃんがね、こんな面白いことをした」という話も出て、行って良かったねと話し、胸をなでおろしていたのですが、3年後の打ち合わせで「あれは辛かった」と泣き出すのです。この驚きと動揺は大きく、子どもは親に本音を隠すのだと痛感しました。楽しかった思い出は本当だと思います。ただ、親元を離れ、ファミリーホームにいる年上の女の子にいろいろと言われることが辛かったそうです。どちらかと言えば負けん気が強い娘なので、年上というだけで命令されると、カチンときてイライラしていたようです。確かにお姉ちゃんが嫌だったとは言っていましたが、3年後に涙する程のこととは想像もしていませんでした。

娘の場合は、帰る日も決まっていて、たかだか1週間の話です。それでもこれだけ強烈に残っていました。児童養護施設出身の向井啓太監督の『チョコレートケーキと法隆寺』の中でも、仲間もできるが、年上の子に仲がいい子と何回も殴り合いを強要されたエピソードが出てきて、子ども同士の関係性が与える影響の強さを感じました。子どもの人数が少なくても影響力の強さを大人は知るべきなのだろうと思います。

もう1か所の涙は、里子の床屋についていった時のエピソードでした。その床屋は、里父が中学時代から通いつけている所で、里親をしていることも知っています。里子の髪を切りながら、床屋さんが「お姉ちゃん、優しいやろ、好きか？」と話しかけたら、里子が「うん、お姉ちゃん優しくて好き」と娘の前で答えてくれたそうです。それまで、名前では呼ばれることの方

が多く、お姉ちゃんと呼ばれないのだろうなと思っていたそうなので、お姉ちゃんと呼んでくれたことと、ケンカもしている仲だったので、それでも優しいと言ってくれたことに感動したそうです。それも涙が出るくらいですから、里子との関係を巡っていろいろな想いを抱えていたのだろうと思います。里子は、女性に対して挑戦的などころがあり、里姉にもそれを出していました。腹が立つことも多い中、里子のためにアルバムを作ったり、お土産を買ってきたりと気遣いをしてきています。その行為に対して、どうしたらいいかわからず、憎らしい態度になってしまうこともあるので、娘の中でも大きな葛藤があったのでしょうか。

打ち合わせで娘が流した涙は、それぞれ違う感情をまとっていました。娘の気持ちを全然わかっていない親だとわかりました。

しがらみの中で

娘は、「私の話しなんか聞いてどうするの？面白くないよ」と言い、人前で話す意味がピンときていないようです。自分の気持ちをそのまま伝えればいいからと話しています。最初は気合を入れて頑張るのですが、途中で面倒くさくなるようで、「私の話しなんて、いらんやん」と言いだす始末。気まぐれな高校生にその気になってもらうのは、骨が折れます。

それでも、話し終わると多くの方が娘に「良かったよ。貴重な話、ありがとう」「自分の子どもと同じように思っているのかなと感じたよ」「すごくリアルに伝わってきた」等、言いに来られます。少しずつ、自分の言葉の意味を感じて



くれているのではないかと思います。

娘の話の中では、人間関係の息苦しさがありました。委託時、娘は中学生で保育所時代からの知り合いも多く、弟ができたと話すと不思議がられます。里親をしていると説明をしても、よくわからないと言われたり、「自分には無理」「何かすごいね」等言われ、マイノリティとしての自分を感じなければならなかったようです。先生や周りの大人に里親をされていてどうかと聞かれたりもしたようで、何故私に聞くのだという苛立ちを感じたそうです。確かに、里親をしている親の方に聞けばいいのですが、直接には聞きにくいのか、娘が聞きやすいタイプなのか、周りの大人達が娘の様子を聞くことが集中したようです。それを親にいちいち言うわけでもなかったのも、気持ちをため込む結果になりました。そのような状況で、高校受験が重なり、部活で発散することもなくなり、中学と家の往復が辛かったとも話していました。

娘は、とにかく一人になる場所が欲しかったと言います。「家族とも友達とも離れた空間で気持ちを切り替えたかったけど、そんな事は無理だ」とも言っています。同じような立場の人と愚痴を言ったりしたら、少しは楽になるかと質問したら、「その人と私のイライラする部分と同じではないから、意味がないと思う」と言っていました。同じ立場の人と実際に話してみると、想像と違う部分も出てくるのでしょうが、里姉として誰かと話したくないという気持ちが先に出るようです。

里兄は、「世の中は理不尽にできている」と言い、その趣旨がどこを指しているのかわかりませんが、家族を回避していると感じる時期がありました。もう、里子とは関わらないようにしていくのかと思っていましたが、里母と里子が言い争いをしていると、2階からそろりと降りてきて、ドアから顔だけ覗かせて様子を見に来ました。里子が渡そうとしないゲームを里兄に預

かるようにお願いしたら、それをしてくれました。里兄はその場に腰を下ろして、里子に何があったのと聞いています。里子は「あいつが腹立つねん」と言い、諭すように「あのな、子どもってというのはな、大人がいないと生きていけない存在なんや」と語り始めるのです。息子が、そんなことを言うなんて、私の想像の枠を超えていて、驚きでした。それを受けて娘も「お兄ちゃんは、いざという時にはちゃんと兄をする人だ」と言います。子ども関係に屈服です。息子が家にいない時は、娘が間に入ってなだめる役をかってくれていました。それもストレスになっていました。不甲斐ない親で、子どもたちに苦しい想いをさせているなあと落ち込みます。里親をしていなくても、いろいろな想いを抱かせてしまうのだと思いますが、一緒に暮らしている中で子どもの気持ちを知るということは、かなり難しい行為であるのだと感じています。

終わりに

里親の語りの中に実子の存在そのものが少ないからなのか、あまり焦点を当てられていないように感じています。里親は、夫婦のどちらかに引っ張られる感はあるでしょうが、ある程度自分の意志で決めていったことなのでしょう。子どもは、どのような立場だったのだろうかと思います。娘は、親がしたいと思うことを応援してあげたいと思ったと言います。

そんな娘が、マガジンの「そうだ、猫に聞いてみよう」の小池英梨子さんのプロジェクトに参加して、元ノラ猫の里親をしたいと言ってきました。我が家には、ミニチュアダックスフンドが2匹いて、元が狩猟犬で性格が甘えん坊なので、一緒に飼うのは難しいだろうと話していましたが、私も娘にできる限りの協力と応援をしたいと思い、どうしたら飼えそうか、飼うた

めには何をしなければならないか娘と一緒に考えていくことにしました。

一つ一つ課題をクリアしてから、猫の説明を聞くために動物病院に行きました。1匹なら何とかかなという気持ちでしたが、きょうだいで保護されていて、仲がいいからできれば一緒に飼ってあげるのがいいと聞き、悩みました。1匹は白血病を持っていると聞かされ、きょうだいで仲良く同じゲージに入っている猫を見て、引き離す気になれず、2匹とも連れて帰ってしまいました。まずは、犬との相性を見るためにトライアルから始めて様子を見ることとなりましたが、実際はその日から家族そろってメロメロです。

里子は、猫なんかいららないと言い、最初は触ろうとしなかったのですが、今は抱っこしたり、猫じゃらしで遊んだりしています。自分の後輩ができて、それだけでも嬉しいのかなと思って見えています。

この子猫たちの親は娘で、私と夫は祖父母です。猫の世話をするのは母である娘なので、食事は娘があげています。朝寝坊の娘に猫たちはニャーニャーと餌をねだりに娘を起こしに行く

せてくれました。こちらの里親も新ビジョンの中で用語を変えると出ているので、違う名称になっていくと思うと話しました。

親は子どもに与えるだけの存在ではないのだと改めて感じています。ネガティブな感情が錯綜する時は、胸が張り裂けそうなくらい辛くもなりますが、協力したり、喜びあえたりもできるものだと学びなおしているところです。



ようになりました。娘からは猫グッズを買ってくる孫に甘いジジ・ババと呼ばれています。

娘は、小池さんからいろいろ教えてもらっていて、動物の里親という用語に反発する声があり、使うのを控えている所が増えていると聞か